

マルコ14章3-9節 「無駄にするほどの愛」

1A 弟子たちの憤慨 3-5

1B 貧しき者の高価な捧げ物 3

2B 賜物と献身に対する軽蔑 4-5

2A イエス様の擁護 6-9

1B 主に対する行為 6

2B 時機への応答 7-8

3B 福音宣教 9

本文

マルコによる福音書14章を開いてください。私たちは 14 章と 15 章にて、イエス様が十字架に付けられるまでの道、しばしば受難と言いますが、その部分を読みます。そして季節も三月の後半に入り、今年は受難週が四月半ばになりますが、キリストの受難を覚える季節に入りました。ちょうど、今のような時期からイエス様はエルサレムに入城されて、いちじくの木初の芽が出る三月の終わりから、四月初めとその前後で過越の祭りがあります。じっくりと、私たちの主イエス・キリストがいかにして苦しみを受けられたか、そして私たちのために苦しみを受けられたかを見ていきましょう。

今朝の本文は、14 章 3-9 節です。「3 さて、イエスがベタニアで、ツアラアトに冒された人シモンの家におられたときのことである。食事をしておられると、ある女の人が、純粹で非常に高価なナルド油の入った小さな壺を持って来て、その壺を割り、イエスの頭に注いだ。4 すると、何人かの者が憤慨して互いに言った。「何のために、香油をこんなに無駄にしたのか。5 この香油なら、三百デナリ以上に売れて、貧しい人たちに施しができたのに。」そして、彼女を厳しく責めた。6 すると、イエスは言われた。「彼女を、そのままにさせておきなさい。なぜ困らせるのですか。わたしのために、良いことをしてくれたのです。7 貧しい人々は、いつもあなたがたと一緒にいます。あなたがたは望むとき、いつでも彼らに良いことをしてあげられます。しかし、わたしは、いつもあなたがたと一緒にいるわけではありません。8 彼女は、自分にできることをしたのです。埋葬に備えて、わたしのからだに、前もって香油を塗ってくれました。9 まことに、あなたがたに言います。世界中どこでも、福音が宣べ伝えられるところでは、この人がしたことも、この人の記念として語られます。」

ここの話は、おそらくは過越の祭りの六日前に起こったものと思われます。マルコ 14 章 1 節には、祭りが二日後に迫っていたとありますが、ヨハネ 12 章にはおそらく同じ出来事が、六日前に起こったと明言されています。なので、マルコは敢えて二日前に過越の祭りが迫っている時の出

来事に、ベタニアにおける、この高価な香油をイエス様に注いだ出来事を挿入しているのでしょう。

1A 弟子たちの憤慨 3-5

マルコは、この女と他の弟子たちを比べたいと願ったのだと思います。14章から15章において、イエス様の苦しみを一言で言い表すなら、「見捨てられる」ということです。イエス様は、ご自身に属しているもの、ご自身が親しんでおられて、近くにあったものから見捨てられる道を辿られます。主がどのようにして、十字架刑に引き渡されたでしょうか？多くの弟子たちの中で、最も信頼して、育てて、訓練していた十二弟子たちの中からです。イスカリオテのユダが、イエス様を裏切りました。そして次に、他の弟子たちです。イエス様が捕えられる時に、みな逃げ去りました。ペテロのみが遠くからついて行きましたが、ついにイエス様を三度、知らないと言います。そして15章に入ると、ユダヤ人たちから見捨てられ、ついには永遠に共におられた父なる神から見捨てられることを経験されます。そのように最も近くにいる十二弟子たちの中から裏切りが起こることの中に、ただ一人、大胆にも主イエスに対して愛を示して共にいた人がいました。それが、ここに出て来る話で、一人の女なのです。

1B 貧しき者の高価な捧げ物 3

3 さて、イエスがベタニアで、ツアラアトに冒された人シモンの家におられたときのことである。食事をしておられると、ある女の人が、純粋で非常に高価なナルド油の入った小さな壺を持って来て、その壺を割り、イエスの頭に注いだ。

この女の人について、ヨハネ12章の話と同じであれば、マリアです。あのマルタの姉妹のマリアです。イエス様の足元でみことばを聞いていたマリアです。けれども、マルコは敢えてその名前をここに挙げていません、「ある女の人」としか言っていません。けれども、マルコは敢えてマリアの名を挙げず、「ある女の人」とだけ言いました。それは、弟子たちがイエス様を裏切ったのに、このように普段は見下されている女が、名の知られない女が、信仰と愛の行いを示したということです。

そして、家が、「ツアラアトに冒された人シモンの家」とあります。ツアラアトはらい病のことですが、らい病患者は律法によって汚れたものとみなされ、イスラエル共同体から離れて生きなければいけません。けれども、今、この家に本人がいるということは、もしかしたら既に治った、イエス様に癒していただいた元らい病人なのかもしれません。マリアとマルタ、またラザロもいて、シモンはもしかしたら彼らのお父さんかもしれません。いずれにしても、ユダヤ人の集まりの中では、共同体の中にすれすれ入っているかのような、隅にいるような人であった家です。

しかも、女が男たちの集まりのところに割り込んで来るのは、給仕でないのであれば、エチケツト違反です。ちょっと昔の日本の会社の会合、いや、今もそうかもしれませんが、思い出してみてください。男たちの会合に、お茶を持ってくること以外で女が割り込んで来たら、「何をここでやって

いるのか」と反発してしまうのと似ています。しかし、彼女はそのようなことは物ともしません。今、この方が死ななければならない、死んで埋葬されるのだという一大事に、彼女は反応し、応答したのです。

ナルド油であります。ナルドというインド産のハーブの根から抽出された、非常に高価な香油であります。客をもてなすために、一滴を付ければそれで十分のものであります。そして香油の壺自体も高価なものです。それを彼女は割って、一気に使ってしまったのです。それが後で弟子が咎めるのですが、三百デナリもするのとのこと。一デナリが一日の労賃ですから、約一年分の価値のあるものが、一気に費やされたのでした。

しかし、彼女にとってはそれでも足りない価値だったと思います。彼女や他の人たちの主、イエス様がこれから死なれるのです！その尊い命が注がれ、血を流され、葬られるのです。その対価を思うのなら、彼女のしていることは、甚だ足りないと思えたことでしょう。しかし、彼女は自分の持っている物の最も高価なものを捧げました。数日前、同じように自分の能力以上の捧げ物をした女がいましたね。神殿でレプタ銅貨二枚を入れた寡です。それをイエス様は、「12:43 だれよりも多くを投げ入れました。」と言われました。

2B 賜物と献身に対する軽蔑 4-5

4 すると、何人かの者が憤慨して互いに言った。「何のために、香油をこんなに無駄にしたのか。
5 この香油なら、三百デナリ以上に売れて、貧しい人たちに施しができたのに。」そして、彼女を厳しく責めた。

弟子たちが激しく憤っています。この憤慨は、かつてヨハネとヤコブが、イエス様の御座の右に着きたい、左に着きたいとお願いしたことが他の弟子たちの耳に入った時に、「10:41 腹を立て始めた」と言った言葉と同じです。全く同じように、理不尽だと思ったのです。さらに、「貧しい人たちに施しができたのに」と言って、あたかも彼らが貧しい人たちのことを思いやっているかのように見えます。しかし、イエス様への愛の献身を示していたのは彼女たちのほうであって、弟子たちのほうはその愛に欠けていたのです。ヨハネの福音書は、イスカリオテのユダがこの非難を先頭になって行っていたようです。けれども、それは「彼が盗人で、金入れを預かりながら、そこに入っているものを盗んでいたからであった」とあります(12:6)。それに他の弟子たちも、乗せられて、顔いて責め立てたのでしよう。

けれども、弟子たちは、計算をしました。「三百デナリ以上に売れて、貧しい人たちに施しができたのに」ということです。ここに大きな間違いがあります。主への奉仕は、計算して行なうものではありません。主ご自身の恵みに心から感動して、それで応答して行なうものです。頭の中で、「これこれをやれば、うまくいく」と計算するものではないのです。心を込めて、行なうものなのです。そこ

には、無駄にさえ見えるような捧げ物があります。「なぜ、そこまで献げるの？こうやって生活したほうが、お金もエネルギーも節約できるじゃない？」と言います。そこには、「心」なのです。

しかし、愛はそんな冷静になれるでしょうか？愛は客観的になれるでしょうか？パウロは言いました、「Ⅱコリ 5:14 キリストの愛が私たちを捕えている」。愛している者は、たった一匹の失われた羊がいたら、九十九匹の羊を置いてでも、それでも捜しに行くのです。パウロは自分のことを、「Ⅰコリ 4:10 キリストのために愚かな者」とまで言いました。けれども、そういった愛の賜物を受けた人たちを、心のこもっていない人々が見れば「無駄」とであると憤ることでしょう。主の前には、その心注がれた捧げ物は、何よりも尊いとみなされるのです。

ダビデもそんな人でした。ダビデに仕える三勇士がいました。ダビデは、自分の生まれ育ったベツレヘムの井戸の水を飲みたいと願いました。けれども、そこはペリシテ人の陣営のど真ん中にあります。ところが、三勇士は陣営を突き破って、それを携えてダビデのところに持ってきました。するとダビデは驚くべきことをします。「Ⅱサム 23:16-17 しかしダビデはそれを飲もうとはせず、それを主の前に注いで、こう言った。『主よ。そんなことをするなど、私には絶対にできません。これは、いのちをかけて行って来た人たちの血ではありませんか。』」ダビデは、その水を単なる水とみなしませんでした。このすごい価値のある水、なんと命のかかった水でした。ですから、それを自分のものとするのはできず、ただ主に捧げるために、地に流したのです。

この女が、三百デナリする香油とその壺を主の頭の注いだのにも、同じ反応です。

2A イエス様の擁護 6-9

そこでイエス様は、この女のしたことを擁護されます。しばしば、キリストの愛に駆り立てられて行なうこと、心から行うことは、中途半端に信じている人々から非難を受けます。中途半端に信じている人、生ぬるい人は、物事を表面しか見ないからです。うわべで人を裁きます。けれども、愛というのは心から出てくるのであり、その動機は目に見ることができません。

1B 主に対する行為 6

6 すると、イエスは言われた。「彼女を、するままだにさせておきなさい。なぜ困らせるのですか。わたしのために、良いことをしてくれたのです。

ここで、女がイエス様に擁護される最大の理由が書かれています。「わたしのために、良いことをしてくれたのです。」です。貧しい人のためではなく、いや、貧しい人のためにすることも大事でしょう、けれどもそういった人々に施しをしたとしても、「わたしのために、良いことをしてくれた」ということには変わりません。

私たちは、主に仕える時に、その間に誰かが入ることはできません。「イエス様に対して行なっている」のであり、イエス様に仕えている他の誰かのために助けたり、仕えても、それは本物ではありません。この人はクリスチャンだから、この人に良くしていれば、自分の天国に行くだろう、と考えたら、それは正しいですか？いいえ、それは間違いですね。自分自身が、神の前に出て、罪を認め、悔い改め、そしてキリストを信じることによるのみ、救われます。けれども、クリスチャンでも、「この人はキリストに仕えている。だから、この人のお手伝いをしていけば、天国に報いがある。」と考えたら？いいえ、あなた自身がキリストに仕えるように召されているのです！

イエス様は、ご自身に、ご自分のなされたことに反応し、応答してほしいのです。ご自身が示された愛に感動してほしいのです。そしてその愛を心から受け入れたのなら、その心は一新されて、主に仕えたいと願うようになります。すべてを捨てて、この方にお従いしたいと思うようになります。そして、仕える相手はイエス様ご自身になるのです。イエス様が言われました、「マタ 25:40 あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、その最も小さい一人にしたことは、わたしにしたのです。」わたしにしている、とイエス様は言われます。だから、仕えること、奉仕すること、また献身することというのは、結局は、イエス様からの愛をいっぱい受けることです。朝ごとに、神の慈しみを受け、イエス様との語らいが必要になります。「哀 3:22-23 主のあわれみは尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。」朝ごとに、イエス様に会って、朝ごとに新たにされる神の憐れみを受けていますか？

もし私たちが、主に対して行なっているのではなく、人に対して行なっているのであれば、必ずつまずきます。それは恵みによって行なっていないからです。イエス様の恵みに触れられて、それで応答しているのであれば、たとえどんなことが起こっても、その愛に支えられて耐え忍ぶことができます。けれども、人に対して行なっているのであれば、そこには無尽蔵の恵みはなく、人に期待して、その期待が裏切られるにしかすぎません。エレミヤがとてつもない圧迫と迫害を受け、人々が神の言葉を拒むことを知りつつ、それでも語ることはできたのは、主に仕えたいと願っていたからです。人に何と思われようが、言われようが、主がこれだけのことをしてくださった、だから私は主に全てを捧げて、この方の言われることを行います、となるのです。誰々のためにしている、ということであれば、それは単にボランティアをしているにしか過ぎなく、自分の力で行なっているにしか過ぎなく、ですから必ず躓きます。ペテロが、次に躓く原因はそれでした。

2B 時機への応答 7-8

7 貧しい人々は、いつもあなたがたと一緒にいます。あなたがたは望むとき、いつでも彼らに良いことをしてあげられます。しかし、わたしは、いつもあなたがたと一緒にいるわけではありません。8 彼女は、自分にできることをしたのです。埋葬に備えて、わたしのからだに、前もって香油を塗ってくれました。

彼女は、自分自身がイエス様にできることは時間が限られていることを知っていました。「いつも

あなたがたと一緒にいるわけではありません。」とイエス様は言われますが、それは死なれて、葬られ、よみがえってからもしばらくしたら、天に昇られるからです。イエス様が地上におられる時は限られているのです。ご自身がそんなに長いこといないということを知っていたから、彼女が今できることを行ったと言っています。これは、例えばこれから余命が短い人に対して、私がどれだけのことをしてあげられるのか？と考えるのと似ているかもしれません。

イエス様を信じるのを遅らせる人は、大抵、このように言います。「折をみて・・・」自分は、今は都合が悪い。だから、折をみてまた福音を聞きたい、となります。しかし、それは聖霊によって罪の自覚が与えられている、その時にこそ聖霊の導きに従い、罪を悔い改めて、キリストを信じる信仰に至らないといけないのです。その「折を見て」という折、機会は二度と来ない場合だってあるのです。女は、イエス様が間もなく捕えられることも察知して、その時にしかできないことを行ったのです。私たちも同じです、自分の状況が良くなっていなければ、主に十分に仕えないとして、自分が仕えることさえ拒んでしまうことがないでしょうか？その状況が良くなるというのは、いつ来るのでしょうか？二度と来ないかもしれません。パウロが言いました、「Ⅱコリ 6:1-2 私たちは神とともに働く者として、あなたがたに勧めます。神の恵みを無駄に受けないようにしてください。神は言われます。「恵みの時に、わたしはあなたに答え、救いの日に、あなたを助ける。」見よ、今は恵みの時、今は救いの日です。」恵みの時があります、ですからその恵みを無駄にしてはいけないのです。

3B 福音宣教 9

9 まことに、あなたがたに言います。世界中どこでも、福音が宣べ伝えられるところでは、この人がしたことも、この人の記念として語られます。」

この女のしたことは、その時は弟子たちによって激しく非難されましたが、抑えつけられるどころか、福音が語られるところでは、必ず彼女のしたことも記念として語られるというのです。事実、今、このようにして福音書の中に女のしたことが書かれているので、伝えられているのです。彼女のしたことは、高価なものを捧げたということで、決してほめられたものではありません。無駄になったのかもしれませんが、けれども、その愛と献身の行為はいつまでも残るということであり、イエス様の行われていた福音宣教は、今、この時になっても続いていたのです。

私が思い出すのは、エレミヤです。彼はその生きていた時は、人々に中傷され、暴力をふるわれ、牢に入れられて死にそうになったこともあり、最後は、無理やりエジプトに連れて行かれました。しかし、その捧げられた人生から、エレミヤの70年預言が知られていて、そしてペルシアの王キュロスの霊を主が奮い立たせて、それで民は帰還しました。何よりも遺されるべきことは、捧げられた魂です。それが効率的に優れていなかったとしても、それでも捧げられた魂が大切なのです。

福音宣教で初めに来た人々は、無駄に見えるような活動で終わっています。初めて沖縄で宣教

したベッテルハイムという宣教師は、10年間でたった数名の回心者しか与えられませんでした。しかし今、沖縄は日本全国でクリスチアンの割合が最も高い県の一つです。韓国の初めの宣教師ロバート・トーマスは、船から降りたらその場で処刑です。しかし、韓国のクリスチアンたちは三割にもなっていると言われていました。そして中南米などの未開地に行った宣教師は、若いのにたった数日で槍で刺されて殺されるということもありました。しかし、そのことで後にその部族全員がクリスチアンになり、刺した本人は牧師になりました。無駄に捧げられたように見える人生によって、実は福音宣教が力強く進んでいるのです。

仲間から裏切られるという悲惨な出来事が描かれていくなかで、一つ、私たちに救い出すような美しい逸話が挿入されていました。私たちは、思い直して、主に向かわないといけません。主の死を思い巡らさないといけません。どれだけの愛と犠牲なのかを自分のものとして知る必要があるでしょう。私たちの奉仕は、何か良いことをしようとするボランティアではありません。その愛に打たれて、自分自身が全てを捧げ、この方だけに心を注ぐ献身によって成り立っています。自分の行いによっては、必ず躓きます。しかし、神の愛と恵みによれば、必ず強められ、最後まで走り抜くことができます。